

感覚障害を伴う重複障害児への学習支援に関する実践研究Ⅱ

—視覚障害を伴う重複障害事例—

○菅井裕行

遠藤亜未奈

(宮城教育大学特別支援教育講座)

(宮城教育大学大学院教育学研究科)

KEY WORDS: 感覚重複障害 係わり手の対応 探索活動

【目的】

特別支援教育が始まり、個々のニーズに基づく教育が行われることになった。感覚障害を伴う重複障害児に対しては、その感覚障害の様相から独自の課題を見出し支援していくことが必要であり、今後もより具体的な報告や教育的支援の範例の蓄積が求められている。視覚障害を伴う場合、空間に関する情報が不足しがちになるため探索活動の促進が重視されなければならない。探索は空間構造の把握だけではなく、例えば机上で扱うモノや、係わり手を探ることも探索である。探索活動の促進は、相互性にもとづく共同活動によって支えられて進展する(菅井, 2007)ことから、係わり手のあり方が重要となる。本研究では、感覚重複障害児に対する学習環境の保障、係わり手に要請される条件について、視覚障害を有する重複障害児との係わり合いを通じて検討する。

【方法】

1. 事例: 第一次硝子体過形成遺残による全盲であり、てんかんを有し、知的障害も疑われている5歳の男児(以下Vと略記)との係わり合いを事例とする。3歳時から児童発達支援センター(通園施設)に通っている。係わり合い当初は、日常生活において、排便や食事の要求を一語でつぶやくことがあるものの、循環するやりとりは見られず、慣れ親しんだ園職員に対しては、音声言語よりも抱きつきや発声により要求する様子が見られていた。モノを手にした時は、その全体像を確かめる様子は見られないものの部分的に確認する様子が見られる。総じて手にしたモノはすぐに放り投げてしまい、手にしていたモノが落ちて自発的に探る様子もあまりない。周囲に人が存在しなくても、一人で声を発したり、歌の数フレーズを口ずさみ、時折一人笑いをしたり、その場で立って回転したり、拳骨で顎や額を強く叩くなどの行動も時折見られる。**2. 係わり合いの概要:** 筆者ら(以下Aと略記)は、通園施設にほぼ隔週で赴き、通園プログラム終了後の延長保育時に毎回1時間半~2時間程度の係わり合いをもった。**3. 期間:** X年5月~X+1年3月の全12回。**4. 記録:** 係わり合いの様子を記録した映像と筆記記録をもとに、毎回の係わり合いにおける探索活動の生起、展開の様子を複数名で同定し、コミュニケーションの展開過程を確認する作業を行った。**5. 倫理的配慮:** 本研究の趣旨及び個人情報保護について口頭で説明し、保護者・通園施設の同意を得た。

【結果】

1. 問題状況の整理: Vには、他者との共同活動を積極的に求める様子が少なく、自己刺激的な行動も随所に見られ、人やモノに対する自発的な探索活動があまり見られない。けれども振動を好み、振動玩具を持ち続けたり、困ったときに人を呼ぶかのように声を上げたり、慣れた人であれば一緒にいて落ち着く様子も見られる。このように状況を整理し、Vに対して、他者との共同活動の促進と探索活動の広がりを目指した係わり合いを行うこととした。**2. 係わり合いの目標・方針:** Vの上記の行動を、Vとの間にまだ受発信が安定的に循環せず、予期しない働きかけに防衛的であると捉え、安心して活動を行えるような関係を築くことを目標に、Vが興味を示したモノを中心に係わり

合いを行うこととした。また働きかけに対するVの様子を見極めつつモノを探索する場面等では、hand under handの原則に則りつつ手のガイドを行うこととした。Vの能動的な探索が見られる場合は、Vが探索している箇所の形状や硬さ、触感などを言葉で伝え、さらに、Vの探索が広がるように、触っていないところをAが軽くたたき、振動や音を出すことでVの注意を喚起することとした。

3. 経過: 全体の経過を探索、働きかけ、相互関係の3つの状況に分けて整理して述べる。

(探索の状況) 係わり合い当初のVは口を使った探索が中心であり、大抵のモノは口に近づけ舌を使って形や硬さを確認し、歯を使って振動を楽しむ様子が多くみられた。ただ玩具を与えるだけでは活動は持続せず、振動や音を加えてようやく注意が向く様子であった。振動を好むことから、電池式振動器(マッサージ器)を手渡すと当初は、足の部分(突起状)を口の中に入れてしばらくなめ続けるという様子であった。そこで箱(14cm×14cm×9cm)に振動玩具を入れて差し出すと、箱の縁を触ってから中に手を入れて探すようになった。次に置き蓋をつけるとその蓋と縁との隙間を探して手の中に入れ探すようになった。さらに箱を机上において椅子に座らせると、机に向けた姿勢で机上の箱から玩具を探し、取り出す様子が見られた。さらに遊びを継続したいときには、当初は「ネネネッ」と声を荒げていたのが、「モー(イ)ッカイ」と明確な要求表現をするようになった。

(働きかけの工夫) 玩具等を扱う際に共同で活動できるような相互の位置を考え、タイミングをみて、モノの向きを変えたり、動かす方向を変えたりして、対象に対するVの注意が持続するように働きかけた。例えば、Aの胡座の中にVが座る体勢で共同でモノを抱え触れる状況を作り、その際、Vが触れているものを「探り」「確かめ」と仮定し、モノの特徴を強調するようにVの手を取ってガイドした。徐々にVの探索時間が長くなり、手を動かす範囲も広がり、丹念に探索する様子が見られるようになった。

(相互関係の様子) 手をつないでジャンプする遊びを楽しむようになり、Aの手を引く、方向をVが変える、Aに擦り寄る、Aの顔や髪の毛を触るなどの動きが見られるようになった。さらにかけ声に合わせて跳ぶ状況を作ったところ、声に合わせて動きを同期(合わせ)させ一緒に跳ぶことができるようになった。ほぼ同時期に、歌のフレーズを交互に歌い合うこともできるようになった。

【考察】

探索活動を活発化させるために、1) ガイドを受け入れてもらえる相互信頼を構築する、2) 共同活動を通じて探索が生じるように一緒に活動する、3) 興味・関心のあるモノの提示から打診し、1つの対象についても、十分な時間をかけて触り、確かめることができるように状況に工夫を加える、ことの重要性が示された。

【文献】

菅井裕行(2007) 障害の重い子どもにおける探索活動の共同化とコミュニケーション。支援教育の展望, 146, 10-13.
(SUGAI Hiroyuki, ENDO Amina)